

第8分科会

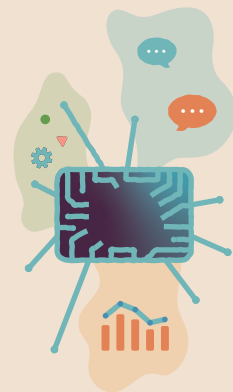
産学連携の新たな可能性

報告者

- 小林 敬志 氏 特定非営利活動法人 SET 交流部副部長
- 勝山 鉄矢 氏 京都府立丹後緑風高校網野学舎 教諭
- 八島 潤子 氏 株式会社コギト デザイナー・イラストレーター

コーディネーター

- 野村 実 氏 大谷大学 社会学部 講師



産学連携の新たな可能性

コーディネーター

大谷大学 社会学部 講師 野村 実

○本分科会のねらい

第8分科会では、大学と多様なアクターとの連携について、地域連携活動の事例をもとに論点整理を図りながら、産学連携の新たな可能性について考えていくことをねらいとした。特に、全国でさまざまなPBL (Project Based Learning) 型授業が展開される中で、自治体や企業等とどのように手を携えながら企画・運営を行っていくべきか、大学以外の外部アクターの視点を交えながら議論を図った。

具体的には、大学連携に主体的かつ積極的に関わっているNPO、高校、民間企業という三者から話題提供をいただき、ワークショップ形式で大学が（に）できること／できないこと、外部アクターとの連携の余地とイノベーションの可能性について議論した。大学教育においてPBLに取り組む上で、担当コーディネーター自身の経験にはなるが、たとえばプロジェクトでの学生のチームビルディングや、対象地域の普段の生活状況の把握など、担当教員の専門性や業務の範疇にはとどまらないところでさまざまなスキルや力が求められる局面がある。こうした課題に対し、本分科会では、大学以外の外部アクターと積極的に連携することによる効果や、他大学の連携事例もふまえた産学連携の新たな可能性を見据えた知見の共有を図った。

○報告の概要

第一報告では、特定非営利活動法人SET 交流部副部長の小林敬志氏から「PBLにおけるチームビルディングの支援」の題で話題提供をいただいた。SETは、岩手県陸前高田市で大学生とともにまちづくり活動を行う団体であり、「人づくり・まちづくり・社会づくり」をコンセプトとしている。小林氏は、大谷大学の地域連携プロジェクト「モビリティデザインプロジェクト」の活動にあたって、3年間にわたってチーム形成の支援に携わっている。こうした観点から、チームとしての共通言語の獲得や理想の設定、現状分析など、実際のチーム形成支援の実施内容の紹介のち、PBLへの貢献として次の点が提示された。第1に授業へのモチベーションの向上、第2にアウトプットの成果の質向上、第3に人間的な成長の支援という3点であり、いずれも大学教育において本質的かつ補完的な内容であった。

第二報告では、京都府立丹後緑風高校網野学舎教諭の勝山鉄矢氏から、「高校における『総合的な探究』と大学との連携」の題で話題提供をいただいた。勝山氏は、「丹後の未来をソウゾウ（想像・創造）する」をコンセプトとする、総合的な探究の時間「SOU-TAN」の取り組みを進める中で、京都市内の大学と連携した活動を実施している。特に京丹後市を含めた京都府北部地域は（2024年度の分科会テーマの一つでもあったが）、いわゆる「大学空白地」であり、高校生という視点からも大学の学びや大学生と触れ合う機会は決して多くはない。こうした背景から、SOU-TANでは丹後地域をフィールドに高校生たちが探究学習を実施しているが、テーマに応じて大学のゼミ活動等と連携することで、高校生が大学生と触れ合う機会の創出につながり、大学での学びを現地で体験することが可能となっている。以上のことから、勝山氏からは大学と高校の連携の有効性として、①探究のノウハウの享受（大学から高校へ）、②遠隔地の実態把握への協力（高校から大学へ）、③互いの学習意欲の刺激、という3点が提示された。加えて、高等教育の「発信と受信」についても言及があり、高校にとっては探究学習における旧態依然の授業展開のブレイクスルーとして、あるいは大学にとっても遠隔地との連携活動で日常的な実態把握をするための新たな策として、それぞれ位置付けられうるものと考えられる。

第三報告では、株式会社コギト・デザイナーの八島潤子氏より、「地図アプリの開発とデザインを通じた産学連携」の題で話題提供いただいた。コギトは、1990年に設立された地図やイラストマップアプリを手がける企業であり、これまでも京都市内外の大学の、かつ多様な学部と連携した事業に取り組んできた。こうした観点から八島氏からは、イラストマップと「大学×地域」との相性の良さとして、①どの学部でも扱える、②PBLにつながる、③地域とつながることができる、という3点が示された。事例では、大谷大学や早稲田大学、嵯峨美術大学などとの連携が紹介され、そのテーマは地域交通や商店街、観光など多岐にわたっている。八島氏からはまた、企業はあくまで「外側の箱」であり、アイデアを出して議論し、アプリやマップを使用してブラッシュアップするのはあくまで学生である点が強調された。最後にまとめ

として、産学連携は「イベントではなく、育つコンテンツ」であると締めくくりの言葉があり、イベントや商品開発だけでなく、継続的な産学連携に向けた「循環」の重要性が提起された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

講演後に休憩を挟み、後半では6グループに分かれてワークショップを実施した。ワークショップでは、前半の話題提供をふまえた気づきの共有や、参加者自身が所属先で取り組んでいる情報の共有、さらに大学にできること／できないことを改めて考えることをねらいとして実施した。

また、ワークショップの間には登壇者への質疑応答も実施し、産学連携を進める上でのリソース（資源）のあり方に主眼を置いた議論が展開された。特に各大学において、連携を進める上での予算をどう獲得するか、あるいは教員と職員による教職協働の重要性などが提起された。さらに、学生や地域、企業などの「相手のペイン（痛み）」にどう寄り添うか、という視点もグループワークで提示され、高度化・複雑化する地域／社会課題への応答の可能性が模索された。

ワークショップ後に行われた各グループからの発表では、たとえば「同じ地域に関わっている複数のゼミ・研究室の活動プログラムをマッピングする」という具体的なアイデアが出されたほか、いわゆる「人材バンク」のように、課題を抱える地域や住民、企業と、それを解決したい／できる大学とをマッチングする仕組みの有用性の議論にもつながった。

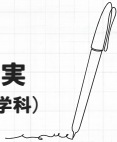
以上をふまえて、本分科会では産学連携を主題として、各大学等での取り組み事例の共有とともに、教職員それぞれが産学連携を図る上での「悩み」を抱えている現状を共有する場にもなった。あらためて登壇者3名の皆様と、（文字通り北海道から沖縄までの）全国各地からご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

スライド1

第31回FD・SDフォーラム 第8分科会
2026年2月28日(土) @同志社大学今出川キャンパス

産学連携の 新たな可能性

担当コーディネーター：野村 実
(大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科)



Be Real
大谷大学

スライド2

01

ワークショップの趣旨説明

スライド3

第8分科会の「問い」

全国各地でさまざまな
PBL型授業が展開される中で、自治体や企業等とどのように
手を携えながら企画・運営を行っていくべきか？

↓

大学が(に)できること／できないこと、
外部アクターとの連携の余地とイノベーションの可能性
についてワークショップ形式で考えていきます。

スライド4

大学コンソーシアム京都 第6ステージプラン (2024-2028)

「産官学民連携による地方創生」

地域連携・地域活性化事業

大学コンソーシアム京都では、第5ステージまで「学まちコラボ事業」等により、大学・学生と地域が連携する活動を支援するとともに、「都市政策研究推進事業」においては、様々な都市課題の研究成果を地域・行政・大学等へ還元することで、地域課題の解決に反映する仕組みの構築に取り組んできました。一方、行政や産業界と連携し、両事業で生み出された知識・アイデアを社会に実装するには至っていません。

第6ステージでは、学生・地域・行政・産業界をつなぐ「コーディネーター」としての機能を強化するとともに、行政や産業界との連携をより一層強め、京都地域の活性化を目指します。また、一定役割を終えた「学まち連携大学」促進事業を廃止するなど、限られたリソースを効果的に投入できるよう第6ステージ中においても積極的に事業の取捨選択を行います。

出典 大学コンソーシアム京都 第6ステージプラン (2024-2028)

スライド5

このテーマ設定の背景①

2024年度のFDSDフォーラム・ワークショップ4
「大学空白地における域学連携と地域活性化」
において提示された課題

↓

高度化・複雑化する地域課題に対して
大学に／大学ができることはなにか？

スライド6

このテーマ設定の背景②

コーディネーター自身が大学で地域連携・PBL活動を
進めていくにあたって直面した3つの課題

① チーム ビルディング <small>研究者としてのトレーニングに ぞみ等の「チーム形成」は含まれていない...? ※講義資料やシラバスの作り方に関する 院生向けのワークショップ等は存在するが...</small>	② 連携地域の 日常的な状況 <small>地域連携を進めていく上で、フィールドワーク 以外での連携先の地域の状況はよくわからない 一特に遠方地域となると、訪問した際の 「取り取られた情報」のみしか得られない</small>	③ 民間企業の 知恵やアイデア <small>面白そうを取り組みを依頼しても マネジメントや事業化の観点では (実務家教員以外には)ほとんどない...?</small>
--	--	--

スライド7

私たちが（試験的に）取り組んできたこと
※大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科・モビリティデザインプロジェクトの例

①チーム
ビルディング



学生のチーム形成を専門とする
NPOへの外部委託

②連携地域の
日常的な状況



地元の高校生の
「総合的な探究」との連携

③民間企業の
知恵やアイデア



民間企業と連携したゲーム開発
地域での実践と改良

スライド8

02
登壇者の紹介

スライド9

**第8分科会
登壇者のご紹介**
大学とさまざまな形で連携いただいているみなさま

NPO法人	<p>特定非営利活動法人SET 交流部副部長 小林 敬志 氏</p>
高校	<p>京都府立丹後緑風高校網野学舎 教諭 勝山 鉄矢 氏</p>
民間企業	<p>株式会社コギト デザイナー・イラストレーター 八島 潤子 氏</p>

スライド10

03
**今日の流れの説明
+導入**

スライド11

**第8分科会
の流れ**

	<p>【前半】 14:30～15:40</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分科会の趣旨説明 ・講演1 「PBLにおけるチームビルディングの支援」 特定非営利活動法人SET 交流部副部長 小林 敬志 氏 ・講演2 「高校における『総合的な探究』と大学との連携」 京都府立丹後緑風高校網野学舎 教諭 勝山 鉄矢 氏 ・講演3 「地図アプリの開発とデザインを通じた産学連携」 株式会社コギト デザイナー・イラストレーター 八島 潤子 氏 <p style="text-align: center;">—— 休憩 ——</p> <p>【後半】 15:50～16:50 <small>※ワークショップ内容は仮のものです。</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ①各連携先に分かれてのふりかえり テーマ：「NPO」「企業」「高校」との連携 ・ワークショップ②今後に向けて テーマ：持続可能な産学/産官学民連携に向けて <p>・総括</p> <p style="text-align: center;">—— 終了 ——</p>
--	---

スライド 1

PBLにおける
 チームビルディングの支援

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 2

目次

- 01 自己紹介・団体紹介
- 02 実施内容-チームビルディングの支援-
- 03 大学生の気づき・学び
- 04 結果・考察

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 3

自己紹介・団体紹介

小林 敬志 (こばやし たかし)
 認定NPO法人SET 交流部副部長
 社会人研修講師 / 大学生関係人口案内人・研究員

青山学院大学 国際政治経済学部 国際政治学科 卒業
 宮城大学大学院 事業構想学研究所 卒業
 特定非営利活動法人SET 所属
 横浜出身、陸前高田在住

略歴:
 2014年 Table For Two 青山学院大学支部代表
 2015年 NPO法人SETの大学生向けインターンシッププログラム Change Maker Study Program参加、その後、学生スタッフ
 2016年 青山学院大学 国際政治経済学部 卒業
 東北学院大学 大学院 入学
 Change Maker Study Program プログラムマネージャー
 2019年 東京外国語大学 中退
 陸前高田市広田町へ移住
 NPO法人SETに所属 (CMSP事業部・経済事業部)
 広田小学校 地域コーディネーターに就任
 2020年 復興庁クラウドファンディング支援事業
 地域コーディネーター 兼務
 2021年~
 NPO法人SET内でシニアスタッフ業務のため研究部に配属
 交流部として自治体職員・企業社員向け研修担当
 高田東中学校 地域コーディネーターに就任
 宮城大学大学院 事業構想学研究所 入学
 2023年~
 宮城大学大学院 事業構想学研究所 卒業

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 4

自己紹介・団体紹介

認定特定非営利活動法人 SET
 (法人番号:7402705000384)

発足: 2011年3月13日
 設立認証年月日: 2013年6月10日
 法人設立: 2013年6月18日
 認定法人格取得: 2025年10月18日
 認定期間: 令和7年10月18日~令和12年10月15日)

理事長: 三井 俊介
 副理事長: 石渡 博之
 理事: 大橋 剛/藤田 謙太/加藤 遼/安達 亮
 監事: 江田 一樹 (Canal.法律事務所 代表)

会員数合計: 113名 (2025年10月時点)
 正会員 (8名): 23人
 賛助会員 (E組): 55人
 ボランティア会員 (T組): 35人

受賞歴

- オーライ！ニッポン次世代内閣総理大臣賞受賞 (2025年)
- 「フューチャスアワード2024」産科 (2025年)
- ふるさと創づくり賞助成金賞受賞 (2022年)
- とうほくSDGsアワード優秀賞受賞 (2022年)
- 東北産政経「デスカバー」岩手県産品の定どビジネス部門入賞 (2020年)
- 第1回学生地域づくり交流大会 最優秀賞受賞 (2020年)
- 令和元年産あしたのまちづくりコンテスト活動賞内閣総理大臣賞受賞 (2018年)
- 日本マコフエス大賞シニアシップ推進最優秀賞受賞 (2018年)
- 復興庁主催新しい東北復興創生優秀賞 (2018年)
- 第7回「東北未来賞」受賞 (2018年)
- 復興大臣感謝状受賞 (2018年)

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 5

自己紹介・団体紹介

2011年3月11日 - 始まりは震災ボランティア

2013-2016年 CMSP+民泊 主要交流事業開始

2022年 - デンマークなど11ヶ国を巡る

2013年 - 任意団体からNPO法人へ

2020年 - 新型コロナで全交流事業が停止

2025年 - 岩手、全国、世界と共に

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 6

自己紹介・団体紹介


人づくり
 まちづくり
 社会づくり

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド7

自己紹介・団体紹介

<p>岩手県内の中高生</p> <p>岩手県内の中高生が、SETの活動に参加しています。</p> <p>1270人</p>	<p>都市部の大学生</p> <p>上野原市、岩手県内の都市部の大学生が、SETの活動に参加しています。</p> <p>1371人</p>
<p>岩手県自治体の若手～中堅職員</p> <p>岩手県自治体の若手～中堅職員が、SETの活動に参加しています。</p> <p>66人</p>	<p>日本全国の修学旅行生</p> <p>日本全国の修学旅行生が、SETの活動に参加しています。</p> <p>14000人</p>

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved 

スライド8

自己紹介・団体紹介

関東の大学生、SETで活動。卒業後、岩手の教員に。


SETの活動をきっかけに、岩手県に移住した若者の数

80名以上

大学卒業後、岩手に移住し、就職している人数

30名以上

新潟出身・岩手県が復興教育の発展被災地支援を機に岩手の教員に

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved 

スライド9

自己紹介・団体紹介

人づくり
まちづくり
社会づくり

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved 

スライド10

自己紹介・団体紹介

2019年度に開催した「岩手県民生活改善のための」

3500人

2020年に開催した「岩手県民生活改善のための」


11/33

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved 

スライド11

自己紹介・団体紹介

人づくり
まちづくり
社会づくり

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved 

スライド12


自己紹介・団体紹介

論文の投稿や書籍の発行

実践をまとめ、より確かな活動づくりと、課題の認知拡大に励んでいます。

「フォルク・ホイスクールのすすめ」

「福島復興が社会を変える」

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved 

スライド 19

大学生の気づき・学び

「他人は変えられないが、自分の伝え方や関わり方は変えられる」
「良い時も、次に良くなるために必要な時間」

1 チームの「衝突」も必要なこと

多くの学生が、意見の食い違いや「混乱期」を本がタイプなものではなく、「いいチームになるために必要なプロセス」であると再認識していました。

「理解をせずスムーズに進む方が良い」と考えていたが、意見の食い違いこそがチームを深める機会だと学んだ。

自分たちが「形成期」や「混乱期」のどこにいるのかという現在地を把握し、矛盾や違和感を踏まえずに、お互いの個性を認識し、

2 伝わらない、は伝え方の伸び代

コミュニケーションの不備を相手のせいにして、「自責(自分から変わること)」として捉え直す姿勢が多く、感想に見られました。

相手に聞いてくれない、あるいは理解してくれない時、それは自分の立ち回しや伝え方に課題があるのではないかと反省を促す。

言葉の背景にある意見や価値観(冰山モデル)を想像し、受容的に伝えようとする姿勢が学んだ。

3 得意・不得意の共有と役割分担

単に作業を等分するのではなく、メンバー個々の特性(強み・弱み)を理解した上での「補充関係」がチームの質を高めるという気づきが見られました。

得意のメンバーに負担が偏る原因は、役割分担の曖昧さや、お互いの得意・不得意を把握できていないことにあると感じた。

自分の苦手なことは素直に頼り、相手が苦手なことは自分が補う。そのためには、得意や特性についてお互いを知るための「積極的質問」が不可欠であると学んだ。

※2025年10月29日の対面講義のリアクションシートより

※初年度受講生として参加し、その後 TAとして関わってくれた大学生は、
「チームの成長曲線は今でも印象に残っている」
「チームを学ぶ、という機会がなかった」
「嫌づきりをファシリテートしてもらえらるので普段話さないことを話せた」

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved

スライド 20

結果・考察

年間の授業を通して、「チーム&コミュニケーションへの理解・意識」が積み重なり向上しPBLへの効果へ

向上への要素

(1)チームへのインプット
(2)定期的な振り返りの場
(3)外部講師との非日常

2つの理解・意識が向上

①チームへの理解・意識
+
②コミュニケーションへの理解・意識

PBLへの効果

i 授業のモチベーション上昇
例) 進捗減少など
ii プロジェクトの成果向上
例) 研究発表会での賞状など
iii 人間的な成長の支援

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved

スライド 21



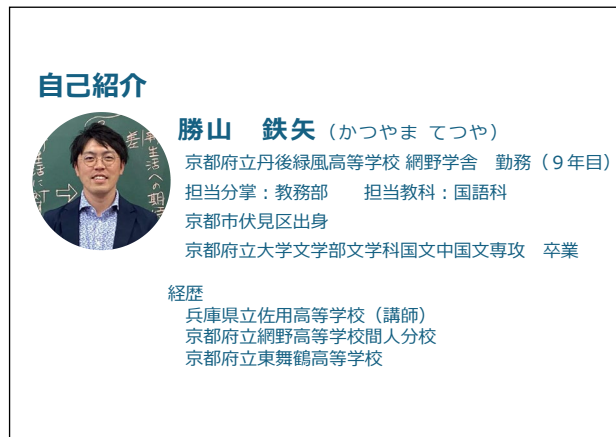
おわり

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved

スライド1



スライド2



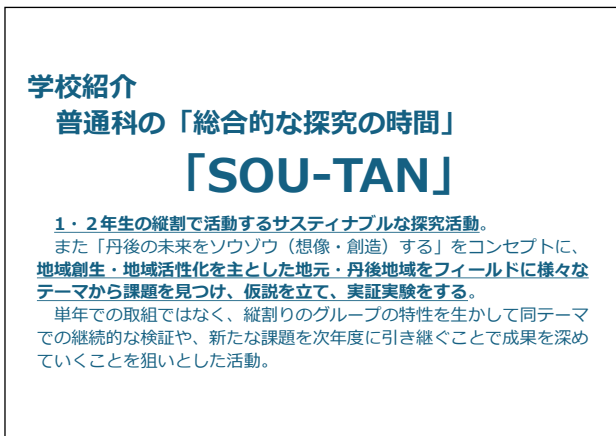
スライド3



スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

● コミュニティゼミ×大谷大学社会学部

町の公共交通を考える

～mobiを広めよう！プロジェクト～



スライド8

● コミュニティゼミ×大谷大学社会学部

町の公共交通を考える

～Mobiの課題について考える～



スライド9

大学と高校の連携の有効性

- ① 探究のノウハウの享受（大学→高校）
- ② 遠隔地の実態把握への協力（高校→大学）
- ③ 互いの学習意欲の刺激

+α 高等教育の発信と受信

高校教育において探究学習の重要性は認識されてきているが、どうしても旧態依然とした授業展開が多く、探究活動のノウハウは乏しい。一方で、大学にとっては遠隔地についての研究について、実態把握やテーマによっては高校生の意見が有効的な場面がある。その両者の課題を解消することに、連携の意義があると考え、またそれに付随する相乗効果的なメリットも感じられている。

スライド10

ご清聴ありがとうございました。
次年度の以降の大学連携先も募集中です！



スライド1

第31回FD・SDフォーラム第8分科会
「産学連携の新たな可能性」

地図アプリの開発とデザインを通じた産学連携



株式会社コギト デザイナー
八島 潤子

スライド2

自己紹介

八島 潤子(やしま じゅんこ)
イラストとデザインでまちを元気にするひと
岡山県岡山市出身

株式会社コギト でデザイナーやっています。
1990年6月設立(35歳ぐらい)のIT会社
京都市に本社があります

2018年8月 リリース “イラスト・マップ アプリ”

ambula

のメインデザイナーです。




スライド3

産学連携は、なぜ続かないのか

産学連携でよく聞く言葉・・・

**「産学連携はいい取り組みだけど、
学生が卒業すると終わってしまう」**



スライド4

鍵は「成果物を資産に変える」こと


産学連携が続かない理由

「何が残るか」が設計されていない

イベント終了 学生 卒業

使える成果物 = 資産が残れば、次の年に引き継げる！

「残る成果物」
地域のイラストマップを作る





スライド5

なぜ“地図”なのか

イラストマップは大学×地域と相性が良い！

- ★どの学部でも扱える
- ★PBLになる
- ★地域とつながれる

地図がない まち はありません

スライド6

ambula map という“装置”

イラストマップをそのままデジタル化できる！

学生が作ったマップをデジタルで公開

“歩く”をさらに後押しする機能「デジタルスタンプラリー」

クイズを動機付けとしてDX地域学習機能「クイズラリー」

重要なのは「デジタルで便利」ということより、
学生の成果物が「使われ続けること」

↓

「続かない」を「続く」に変える




スライド7

事例1 大谷大学 社会学部 京丹後の事例

「京丹後市の公共交通を、すごくくいたら面白いのでは？」

京丹後市での『モビリティロゲイニング』という地域イベントに！

行政 住民 企業

これはもはや地域の事業！

スライド8

事例2 大谷大学 北大路ロゲイニング

大谷大学地域連携室
地域によりそプロジェクト(ちいプロ)
北大路ロゲイニング

北大路周辺を周遊しロゲイニングで得点を競うイベントを2025年12月に開催。地域の企業に協賛いただき、ゴールを地域の老人ホームイベント会場にし、大成功いたしました。

老人ホーム 商店街 企業

キタロゲ
北大路ロゲイニング

当日の様子

スライド9

事例3 大谷大学 幼児教育マップ

大谷大学 教育学部 幼児教育コース
北大路周辺子ども・子育てマップ

大谷大学幼児教育コース(西村ゼミ)の学生が大学近辺をお散歩しながら、子供と遊ぶと楽しい場所(公園・広場)を探し、マップを作成いたしました。

北大路周辺が子ども・子育てマップ "Kodomoto"

Webでご覧いただけます

学生が卒業しても、地域に残る！

スライド10

他大学でも回る！

早稲田大学 創造理工学研究所
「商店街の輪」～高田馬場西イラストマップ2025～

ベースの日本語マップを様々な活用！

多言語マップの作成

同じ内容を日本語/英語/中国語の3か国語に翻訳。

嵯峨美術大学 デザイン学部 観光学科

学生たちが取材して地域のマップ制作
作成したマップを3年継続して情報更新、
企業案件のコラボを実現！

どの大学でも、このモデルは回る

あらしやまマップ 2023 西陣マップ 2025

スライド11

私たちの立ち位置

「私たちは外側の箱である」を常に意識
アイデアを出し、議論し、使用してブラッシュアップ
していくのはあくまで学生

教育の主導権は大学にある
学生たちのアイデアをどのようにスムーズに具現化していくかを考えるのが我々の役目

スライド12

産学連携を“観光産業”につなぐ

持続の仕組み

学生(若者)/ 大学 観光産業/ 旅行代理店 ホテル

学生が作ったマップが、

- ★ホテルの周辺散策マップになる
- ★旅行会社のツアーになる
- ★商店街の集客ツールになる…など

大学外で 商品として世に出せるレベルまで内容を高める

= 産学連携は“循環”

まとめ

**産学連携は
イベントではなく、育つコンテンツ**

地図は、その最初の一步として、
大学と地域をつなぐ、とても強いメディア

以上、ありがとうございました！

